
短編(四)まどか☆マギカ二次転生小説導入

豆出雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編（四） まどか☆マギカ二次転生小説導入

【Nコード】

N0944BA

【作者名】

弓出雲

【あらすじ】

魔法少女まどか☆マギカ二次小説転生物
転生者多数

プロットとしては

主人公が転生者を潰しまくる

主要キャラは全員ハッピーエンド

狂気

テーマは沙耶の唄って所かなあ

あんまり長く続けるつもりはありません。
完結はさせる。
4月までに終わらせるよ。

1◇神との対話

「在り来りな話をしようか」

静かな声が響き渡る。

暗い部屋にただ一人俺はいた。

何故ここにいるのかは何一つわからないと言うのに、不思議なことに焦る気持ちも疑問もない。

ただぼんやりと虚空を見つめていると、その声は響いてきた。

「君は死んだ。在り来りなことにね。簡単な話だ。鉢植えが落ちてきた。鉢植えの中身は時期に合ったポインセチア。赤い花は星の形。流れ星が君を殺したといえ、中々在り来りでない話だ」

甚だどうでもいい話だ。

そして、俺はどうでもいいような原因で死んだのか。

トラックに撥ねられて無残に死ぬわけでもなく、幼女を庇ってヒーローのように死ぬわけでもなく、戦争の中で当然のように死ぬわけでもなく、平和な世界で突発的に起きた偶然に殺された。死に贅沢はないが、せめてもう少しまともに死にたかった。

「ま、神たる私が殺したのだがね」

前言撤回、中々運命的な死に方だ。
神に殺されるだなんて、歴史の大海を見渡しても他にそうはあるまい。

……しかし、わからないことがいくつかあるな。

「何故俺を殺したんだ？一応俺は普通に家族がいて普通に友達がいて中々良い成績で学校生活を過ごしている普通にどこにでもある学生でしかなかったんだがな。何か俺の前世なんかに恨みでもあったか」

「いや、単に趣味だよ」

「は？趣味？」

「君は蟻の一生に興味があるかい？」

いきなり、何の話だ？

呆然と立ち尽くす俺を置いて話を続ける神。

「君はいつも公園を通って登下校するね。小学校中学校高校、今年で11年になるかな？君は必ずその公園を通っている。その中で君は蟻を数匹踏み殺しているんだよ？」

はあ？なんだそれ？

「君は蟻に悪いと思ったことはないだろう？蟻にも一生があると言
うに君は一生を奪っておきながら何も感じない。やれやれ君は悪い
子だよ」

「たかだか蟻の数匹だろう？しかも事故みたいなもんじゃねえか。
悪いとは思うが……まさか、それで俺は死んだのか！？」

「いや、違うよ」

「じゃあ、何なんだよ。今の話は！？」

「まあまあ、落ちつきなよ。要するに、だ。私にとっての君達人間
も、君達にとっての蟻とそう変わらないのだよ」

……つまり、は。

「別に君達がいくら死のうと、どんな理由で死のうと、誰が死のう
と、興味はないのさ。どんな一生だろうと、どんな性格だろうと、
どんな境遇でも関係ない。気まぐれに私は殺すよ。人間をね」

「…………じゃあ、俺はお前の気まぐれに殺されたのか？」

「そうだね。そういうこと。強いて理由を言うなら、蟻を殺したから、かな」

「なんだよ、それ……俺の命は蟻と同じ価値ってことかよ……」

「ふふっ。『蜘蛛の糸』って知ってるかい？」

「…………今度は何だよ。また、くだらない話なのか……」

「くだらないだなんて酷いなあ。私はとっても楽しいのに。まあ、私はね太宰治の『蜘蛛の糸』がね」

「いや、芥川龍之介だろ」

「ありゃ、そうだったけ？まあ、どっちでもいいよ」

「お前本当に神かよ」

「まあまあ、でね『蜘蛛の糸』ね、私は実に神というものや人間というものの実像を写しているのだと思うのだよ」

「……………は？」

「だってさ、仏は、多くの人間を害し時に命まで奪った罪人に対して情けをかけるんだよ。たった一匹の蜘蛛を助けた、だなんてつまらない理由でね。罪人はね、火を放って罪なき人の命を多く奪った。罪人はね、物を持たない人から更に物を奪って間接的に餓死させた。罪人はね、死ぬまで罪人であり続けた。それなのにたった一つの氣まぐれで殺さなかった蜘蛛を理由に情けをかけられるんだ。つまりさ、仏は罪人に殺された人々なんてどうでもいいけど、蜘蛛さんは大切だから蜘蛛さんを殺さなかった罪人を助けてやろうかなニヤリって思ったわけだよ。実に面白いよね」

「……歪んでやがる」

「いったいどうやってたらそんな考えになる。そんな目的である小説は作られたわけじゃないだろう。」

「だからね、私はその真似をしたんだ。蟻よりも軽いその命、君は実につまらない理由で死んだんだよ。ちなみに在り来りな話、君の書類にコーヒー零しちゃってねー、ごめんなさーい」

心が竦ってない。悪意が何ひとつない。歪んでいる。何もかもが歪んでいる。なんだよこれ悪夢か。

怖い。

「ま、実際人間を気まぐれに殺すのが趣味で君を殺した。私は神だから、君達生み出したから、殺すのも自由。怨まないでね、憎まないでね、私は悪くないし、誰も悪くない。強いて言えば、君の運が悪い」

笑い声。神はこんなに不快なものなのか。

「さて、オタクな君にははたまた在り来りな話だが……転生とはどう思う？」

「ん、ああ………実に在り来りだね」

「いや、それを聞きたいわけではない。君はしたいかね？」

「別に……」

「興味ないのかい？チート転生とは厨二の醍醐味に近いだろう。君

はあれかね、今流行りの『チートしたくないのですう』なアンチな人なのかね？」

「ん？ いや、転生するならチートは羨ましいよ。バカバカしいとは思うけれど、もらえるなら貰わないと損だろう？ 無料より安いものはないし、俺だって何度もチート転生な想像はしたさ」

「じゃあ、何故、転生しようと思わないのかね？」

「はあ」

溜息をつく。なんてくだらない質問なんだろう。もはや生に興味はない。

神は恐ろしく、世界は遊び場、誰も逆らえない箱庭と知って俺は清々しくは生きれない。

「単純な話だよ。俺は物語の中の主人公にはなれない。あんな前衛的な奴らが主人公ってだけで可笑しいんだ。二次転生小説なんてそれだけでギャグだ。俺はこのまま死んでいいよ。」

こんな神の下で生まれ変わっても悲惨なだけ、何もかもを忘れたい。

「駄目駄目だよ。君には転生してもらわないと、そして、君には

主人公になってももらわないといけないんだから」

「何でだよ……このまま死なせてくれよ」

「君には他の転生者達を殺してもらおうと思ってるからね。期待してるよ。大丈夫、君の勝ちは確定的だよ。だってそうだろう。主人公は勝つんだから」

ふと、

俺が誰か思い出せなくなった。

何で？

俺は誰だ？

暗い部屋は白くなっていく。

脈動する。世界は赤く籠の中。

胎動する。回りは水と泡の中。

「君にはチートをあげるよ。ふふふ。君は東方は好きかい？私が考えた最強の能力！『再生を操る程度の能力』、それをあげよう。とっても便利さ。ま、あとはチラホラ。私の加護があるから君が他の転生者には殺されないし、適度にがんばれ」

俺の記憶の中の彼も彼女もあの場所もあの家もどこかに流れて、洗われていく。

家族は暖かったかな？友達の良いものだったかな？恋は難しいものだったかな？

「君の転生する世界は魔法少女まどか☆マギカ、悲劇を良い方向に変えなよ。転生者は沢山送るから、じゃんじゃん殺してくれ。ちなみに送られて来る転生者達にはチート10個ずつあげちゃうからさ、厄介かもねー」

ああ、流れていく。

「それじゃ、ハブアナイスライフ」

舞台裏

「さーて、今回も楽しみだなあ。どんな戦いになるんだろう」

私は手元に置かれていたコーヒーを間違って零す。

「あ、間違えちゃったー（笑）」

書類が染みになっちゃったよ。

誰かが警察官に銃で撃たれて死んだ。

誰かがどこかの内乱で政府軍に撃たれて死んだ。

五人くらいトラックに轢かれて死んだ。

三人くらい溺れて死んだ。

「仕方ない。転生させちゃうか。うんうん。仕方ない仕方ない。」

そして、私は彼等と呼んだ。

「在り来りな話をしようか」

2◇転生者 磨霊仕草（みがたま しぐさ）

つまらねえ話だ。

俺様は転生という人生の節目を迎え、くだらない物語の世界に入り込んだ。

魔法少女だかアラジンだかは知らねえが、とりあえずまどかだかマホトマだか変な名前のアマを助けなくちゃならんらしい。

しかも、女となって、だ。

回りには俺以外に9人のガキ共が居て、俺様と同様に死に偉大なる神に呼び出されていた。

神は言った。『来たる世界の情報はくれてやる。偉大なる力もくれてやる。好きに生きろ。刺激的に生きろ』

毎日神に祈りを捧げ、時に食事をぬき、貧しい者達に施しを与えたかいがあったというもの。

偉大なるムハマド如く、神の啓示を受けるとは思わなかった。

回りはやけに騒がしく興奮しているようだが、無理もない。神の声を直に聞いた。それだけで感無量だろう。

ああ、神は俺様の善行をご覧になってくれたのだ。
新たなる世界でも善行を積み、より神に近づかねば。

とは言え、だ。

生まれ変わって見たら、社会は安寧で人々は腑抜けきり、ジャパンだかアンパンだか知らねえが、実に面白みがねえ。

革命しろよ。

政治や経済が順調に歪み始めてるっつーのに何の反応もねえ。日本っつー国はあれか？平和で頭はいい中々優れた国のくせにキ◇タマは潰れてんのか？根性がねえ。

俺様を見習え。国軍に喧嘩売ってぶっ殺されたんだぜ？

歪んだ社会に一石を投じて死んだんだ。お前らはのうのうと生を過ごして楽しいのか。チキン共が。

それにせっかく神の御技を頂いたっていうのに、活かせねえじゃねえか。

刺激的に過ぎないと神の啓示に従えねえだろ。

まあいい。

ま、可哀相な羊を救うのが今生の目的だ。

魔法少女まどか☆マギカ、だっけか？

全部神によって預言されたが。

ふん。あの猫に似た侵略者め。まるで政府のやり方だ。くだらない事ばかりぬかして肝心なことはいいやがらねえ。まるで悪魔だ。異境の怪物め。滅ぼしてやる。

最後は鹿目まどかが偉大なる魂となることで救いになったみたいだが、クソッ、やはり納得がいかねえ。

特に美樹さやか。

あいつは助からないのか……。

せめて恋だけでも恭介に対する成就させなくてはならん。

他の連中がどう動くかわからんが、魔法少女とやらを救ってやる。
それが神の意思なればな。



俺様は見滝原中学校に通っている。

朝4時に起き、いつも通り神への感謝の祈りを捧げた後にストレッチやら何やら日課をこなして、シャワーを浴びて登校する。

通学路は赤やら青やら緑やらばらばらの色を持つ、お前らの血は何色だ？とツツコミたくなるような髪色で彩られている。

実にキモい。

そういう私も銀髪なのだが。

まあ、それはこの世界の神の趣味が悪いのだろう、と納得して騒がしい通学路を歩いていく。

そして、いつもの場所で奴を待つ。

来た。

「よ。仕草^{しぐさ}。相変わらず早いんだね。実に良いことだ」

「ふん。貴君が遅いのだ。5分前行動が神の定めた戒律だ。」

「いや、それは違うだろう」

苦笑しながらこちらに近づいてくる。時間は……相変わらず正確過ぎるほど正確。遅くもなく早くもない、まさにピッタリだ。

奴の名前は 笠原^{かさはら} 箆女^{かごめ}

若草色の髪と目の同級生だ。

幼少の頃からの親友であり、中々粹な娘だ。

生前であれば、娶りたいほどの聡明で気の利く奴だ。

だが、残念。今の俺様は奴と同じく女の身だ。

神の戒律によれば、同性での色事は重罪。

俺様は女として良き夫を見つけねばならんが、やれやれ、今から難儀な話だ。

「それじゃ、早く行こうか。ゆっくりし過ぎたら遅れてしまうよ」

「そうだな。行くか」

視界の端に仲よさ気な四人組の女子を捕らえる。

鹿目まどか。美樹さやか。志筑仁美。そして、転生者であろう恐山茜^{おそれやま あかね}

恐山、か。接触する必要があるか。
余計な衝突は避けたいところだ。

そろそろ、侵略者共が介入してくる時期か。
やっと、つまらない話は終わりってことだな。
腕が鳴るぜ。

神の名の元に、革命だぜ。
ベイベ―。

「仕草―。何やってるんだ―。早く行くぞ―」

「あ―、わりいな。今行くぜ。」

3◇主人公 笠原箆女（かさはら かごめ）

俺は残念ながら死ぬことが出来ず、この世界に生まれ変わることもなかった。

かさはら
笠原 箆女 かごめ

それが今の俺の名だ。

志筑仁美より黄色に近い緑の若草色の髪と瞳を持つ女として転生した。

今の身長は他の一般と比べて小さいように思う。

ごく一般の家庭で生まれ、一人の姉と一人の兄、そして両親と共に五人で暮らしている。

特に不自由もなく、俺について何一つ疑われることないある意味ではご都合に沿った家族だった。

前の記憶は生まれ変わる前になぜか消えた。

理由はわからないが、恐らく神とやらの仕業だろう。だから、前の名前も忘れている。

やれやれ。自分というものがわからなくなるから記憶は奪わないでほしかったんだがな。



現在、登校中。

隣には転生者である、神に狂信的な磨霊みかたま 仕草しぐさが歩いている。

あわよくば利用してやろうと小さい頃から接触して取りいり、中々良い友人となった。

狂信的で乱雑な言葉遣いとは裏腹に、模範的で几帳面な性格をしている。

人が困っていたら助けるし、友人も多くよく相談を受けている。野良犬を見かければ餌をあげ、週末にはボランティアに従事している。ゴミ拾いが趣味で、それでいて勉強も家事も欠かさない。

宗教と言うのは、怖いイメージしか持っていなかったが、上手くハマればここまで好人物を生み出すこともあるのかと、少し感心してしまった。勿論、これは仕草個人の性格に由来する所もあるのだろうが、やはり彼女の神に対する敬謙な態度が占める影響も大きいだろう。

仕草は俺が転生者であることは知らない。

というか、この世界で俺以外に知っている人間はいないと思う。

俺は転生者の情報は全て与えられているため、仕草が転生者であることを生まれた時から知っていた。

仕草は生前、とある独裁政権国家で内乱を起こした民衆軍の幹部の位置におり、その衝突の中で命を落としたらしい。

死後は弱者を救済するために全てを賭けて戦い続けた英雄として名を残している。

すげえ。

何で転生させたし。

転生は神の導きとしておおらかに受け止め、物語に大いに感化された結果、全ての救済という身に過ぎた願いではなく、美樹さやかの恋の成就を最低ラインに添えて物語に関わっていくつもりだろうだ。

やべえな。

善人過ぎる。

俺はこんな奴を殺さないといけないのかよ。

正直仕草は現在来ている転生者の中でも一二を争う善人だ。

利己的に能力を使わずに、今のところ能力は他人のためにしか使っていない。

英雄と呼ばれただけはある。

力の使い方を弁えている。

何て言うか……最初に会えた転生者が仕草で良かった。

「何だよ…、こっち見て。俺様の顔に何かついてるか？」

「いや、別に。今日も可愛いなと思って」

「バツ!!! お前ッ! 可愛くねーよ! 突然何言ってんだゴラァッ!!!」

「あははっ。ごめんごめん！」



転生者は定期的に増える。

現在は16名。

そいつらを殺す役割を担う俺は、転生者の情報は全て与えられていて、転生者が増える度に新しい情報ももらえる。

まだ原作すら始まっていけないと言うのに、馬鹿な連中は勝手に殺しあい始めて、魔女に喰われ、同じ転生者に殺され、絶望の淵で魔

「やあ。今日はどうしたんだい？ いよいよ君も魔法少女になる覚悟ができたのかな？」

「ええ。私も叶えたい願いがあるのよ」

「あれ？ そうなのかい。君からは良質の絶望の匂いがするけれど、希望の匂いはしないから魔法少女になるとは思わなかったんだだけね」

「そんなこと私に言っているの？ キューベ―。」

「キューベ―と呼んで欲しいね。君は転生者だろう？ 笠原箆女。魔法少女じゃないのに君は少し詳し過ぎるからね」

「……俺以外に知る奴はいねえと思っていたんだがな。腐ってもインキュベーター、どこから覗いてるかわからねえってことか。なあ。
すみかわ はくざん
墨河 白山」

「……どこでその名前を……。君も暁美ほむらのようなイレギュラーなのかな？ 今はキューベ―だよ。笠原箆女。」

「そうだな。感情が欠落した人形め」

「世界を救うためにより効率の良い方法を選んだだけさ。鹿目まどかには力がある。世界を変えるだけの大きな力がね。それを使わない手はないよ。それに僕は強制しない。鹿目まどかが自分で契約して魔法少女になるだけだ」

「相変わらず口だけは達者だな。キュウベえ」

「さて、本題に戻ろう。笠原箆女」

「ああ、そうだな……。俺はこのためにお前にお前に会いに来たんだ。……叶えたい願いがある。キュウベえ!!」

「その願いは、命に代えても叶えたい願いなのかい？」

「当然だ!!」

「契約だ。笠原箆女」

「神め!死ね!」

「いや、それはいくら何でも無理だよ」

4◇逆行者 曉美ほむら（あけみ ほむら）

何かがおかしい。



私は幾星霜も繰り返してきた悪夢を今度こそ終わらせるために再び始まりまで戻ってきた。

私が幾度もこの時間軸まで戻り、行動を変える度にまどかは、美樹さやかは、巴ミミは、佐倉杏子は、違う形で絶望の中に堕ちていく。誰ひとり助かることはなく、誰ひとり救うことはできなかった。

結果的に私のエゴで味わう必要のない苦しみを彼女達に与えてしまったのではないか、と自分を責めたことも少なくない。

……でも、もう遅いのだ。

私は戦わなければならない。鹿目まどか、彼女を救わないと私の願いは果たされない。絶対に魔女になんてさせない。どんな犠牲を払っても私は戦い続ける。

前回の絶望、最後にまどかを魔女にしたときの惨劇を思い出し、また涙が出そうになったがそれは駄目だ。

自分を奮い立たせる。

泣いてはいけない。

彼女を救うまで、絶対に泣かない。
進むのだ。



あれは、誰だ？

私は見滝原中学校への転校を早めるための手続きをしに今日は朝から中学校へ向かう。

その途中で鹿目まどかの姿を確認する。

この時期は少し自信なさ気で、いつもちよつとだけ無理をしている。自分に何ができるかを探していて、確かこの朝から私の見慣れた赤いリボンで髪を留めるようになった。

ちよつとした変化が大きな変化に結び付きますように、だなんて少しお茶目なことを言っていた。

今の彼女はあの時の彼女とは違うけれど、その想いはきっと変わらない。

変化を望むまどかには悪いと思うけれど、もう迷わない。

あなたはそのままがいい。

だけど

あれは、誰だ？

この時期に一緒に登校するのは、美樹さやかと志筑仁美の二人だけだったはずだ。

それに加えて一人新しい女子生徒が加わっている。

紫色の髪と少し緩みがちなタイとだらし無く着崩した制服、あんな子長い間学校に居るけれど見たことがない。

今までこんなことはなかった。

私が行動を起こすまでは大筋の変化はないはずなのだ。

確かにリボンが赤に変わるまで数日のブレがあったり、美樹さやかが風邪気味だったり、小さな違いはあった。

しかし、こんな大きな変化は無かったはずだ。

偶然？単なる可能性の一つ？それとも今後に関わるもの？

色々な考えが頭を巡るけれど頭を振って思考を止める。

今はまだ判断の時じゃない。

まだ様子を見ていよう。

危険な因子なら、不本意だけど排除すればいい。

そう考えながら、不確定因子の彼女を見てみると、一瞬こちらを見た……気がした。



おそれやま あかね
恐山茜

それが彼女の名前だった。

やはり見たことがない。

なのに、彼女は同じ学校で同じ学年で同じクラスで間違いなかった。しかも、転校生という訳でもなく、ちゃんと見滝原市で育ち、まど

かとも幼い頃からの付き合いらしい。

両親共に見滝原市で育ち、何も疑う余地のない普通のサラリーマンと主婦でしかない。

つまり、現在のまどかと同じく普通の女子中学生でしかないのだ。

考え過ぎなのだろう。

少し大きな変化に戸惑ってしまったが、何も変わらない。

もしかしたら彼女も巻き込まれるかもしれないが、出来る限りそれは防ごう。

仮に失敗してもワルプルギスの夜に対する貴重な戦力になるかもしれない。



私は、違う世界に来てしまったのだろうか？
所謂平行世界、そういった世界に。

恐山茜の件で少し不安を覚えた私は、これから関わる可能性が高い人物達について色々調べた。

鹿目まどか

美樹さやか

巴マミ

佐倉杏子

志筑仁美

上条恭介

まどかに関しては、恐山茜だけだった。

今では亡くなった人も含めて、美樹さやかには今までとは異なる人物が一人、巴マミには五人、佐倉杏子には六人、志筑仁美には二人、上条恭介には二人、今までとは違う人物が関わっていた。

前回の世界までは存在すらなかった人間だ。

私の能力は逆行と停止であって世界移動ではないはずなのに、どうして増えたのだろうか？

明らかにおかしい。

しかも、全員過去が変わっている。結果は大差はないのに過程が変わっている。

美樹さやかには上条恭介との共通の友達、子守^{ねかみ} 鵜^{つぐみ}が居てよく共にお見舞いに行っている。子守の方は上条恭介よりもむしろ美樹さやかにお熱をあげている……とか。

巴マミは、交通事故は回避したにも関わらず、やはり何か不自然な事故によって家族を失っており、天涯孤独の身となっている。今はその事故で共に魔法少女になった設楽 ユカ（したら ゆか）と共に活動している。

佐倉^{さくら} 杏子^{きょうこ}の家族は宗教で失敗したもののそのあと複数の謎の人物達の手によって復興し、持ち直しかけていたらしい。しかし、突然起きた一家虐殺事件によって佐倉杏子以外の家族とその復興の手伝いをした人達は殺されている。犯人は意味不明な供述をしていると書いてあった……おそらく、魔女の仕業だ。今までと同様、独りで活動している。

志筑仁美には以前存在しなかった新たな不確定因子、五月雨^{さみだれ} 近江^{おうみ}と仲が良く、同じ茶道の教室や塾などに通っているようだ。

上条^{かみじょう} 恭介^{きょうすけ}は以前は事故で腕を使えなくなったはずなのだが、今回

はそれは回避したにも関わらず、通り魔にその箇所を切られて入院している。

何か、全ての変化のパターンに人為的な作為を感じる。

しかも一枚岩ではなくて、多数の思惑が絡んでいる。

私が知っている悲惨な過去を必ず回避できていることが気になる。

それでいて結局皆似た結末になっている。

巴ミなんかは特におかしい。事故さえ回避すれば魔法少女なんてならなくても良いと思っていたのに、強制的に誰かが悲劇に導いたようだ。

やはり、何か起きてる。

それに加えて町の魔法少女・魔女の数が違う。

町を見回っていると、見知らぬ魔法少女三人と出会った。

同じ見滝原中学校の学生であると言っていたが、三人ともどこか嫌らしい目線を感じた。

魔法少女、準じて魔女が今までより多い……。

魔女が多いということは、絶望に堕ちた魔法少女の数も多いということだ。

あのインキュベーター。いつもより活動が活発なの？

奴らからしたら魔法少女の数は増やしすぎても取り返しがつくとは言え、今まででは有り得ない。

そもそも魔法少女に勧誘するほどの才覚を持つ者なんてあまり多くないと奴ら自身が言っていたのに。

例外の美樹さやかのように才覚は少なくても、浅はかとは言え、必死な願いを持つ者なんてあまりいないはずだ。

それに、ワルプルギスの夜。

今は私の存在に気づいていないはずのインキュベーターがまどかを魔法少女に勧誘する大きな理由となるはずだ。
なのに魔法少女の人数が多過ぎたら、まどかを無理矢理にでも契約させる理由が薄くなってしまう。

「いったい、どうなってるの………?」

この状況はあまり良いとは言えない。

魔法少女同士のグリーンシードの奪い合いの衝突が激しい上に、準じて魔女の数も多いから今までよりずっと危険だ。

魔法少女の数が増えたからといって、まどかに迫るインキュベーターの魔の手が緩むなんて有り得ない。

まどかは今ではそれくらいに大きすぎる力を持つてる。……それは私のせいだが。

「今度こそ………」

まどかを救ってみせる。

どんな環境でも今はや今更だ。

確かに今回がどんなに危険でも、先に言ったように逆を返せば、ワルプルギスの夜を打ち倒す大きな戦力になる。
もしかしたら今回こそが転機なのかもしれない。



「……………何よ。これ」

私は自衛隊駐屯基地の武器庫に忍び込み、いつも通り武器を拝借しようとしていた。

最初こそ自作の手榴弾などを作って使用していたが、やはり本格的に戦場で使用する武器の方が魔女に対する威力はあがる。

もちろん、武器の一つ一つに魔法少女固有の力を注ぎ込まないと魔女に対してダメージは与えられないので、私のように武器を自ら生成できないのは武器を手に入れるのと武器に力を籠めるのが二度手間であつた。

とは言え、人間の負の遺産にして知の結晶である武器兵器は他の魔法少女よりも火力が大きい。

時間を止めることのできる私はどんなに速い相手でも必中させることができるので、威力・手数共に非常に相性がいい。

だから、訓練以外ではあまり使われていないとは言え、強力な武器の置いてある自衛隊駐屯基地にはいつもお世話になっている。

セキュリティも最初は抜けるのに苦労したが、わかれば後は簡単なものだった。

私はいつも通り時間を止めながら内部に侵入したのだが、今から考えてみれば『いつも通り』だなんて考えるのは間違いだつた。

セキュリティがいつもよりすごく複雑になっていた。網膜認証とか指紋認証は当然として、カード・赤外線によるサーモグラフィの個人認証は更に厳格化していた。

いや、そこまでなら私も常識の範囲内の技術なのだがやはりいつもとは全く異なっており戦略級の武器庫を利用する人間などほとんどいないため侵入するのに苦労した。今までは個人認証は魔法で簡単に抜けられたのだが、カードとかサーモグラフィなどは本人でないと

抜けられない。

やっこの思いで内部に侵入して安心していると、今度は警備を行う機械兵士が居た。

二足歩行。自動制御。手には見たことのない装飾の銃。

あれ？私過去に來たはずだね？と思わず自問してしまった。

アシモはどうしたと言いたくなる程の技術躍進だ。

とは言え、とっさに時間を止めて逃走したため見つからずに済んだが、本当にこの世界は何なのだろうか？

そして、ほとんど疲れながらようやく目的の武器庫内部まで着いた。さっきの二足歩行型の機械兵士はここにはおらず、すごく安心した。

内部を見渡すと、もはや予想はしていたが、見覚えのない銃火機やら火力兵器が並んでいる。

少し嫌な予感を感じながらその一つを手にとる。

「レ、レーザーガン…？」

小さな金属製の箱に入った白い幾何学的な紋様の銃。

それに備え付けられてあった説明書きは、現代の常識を超えていた。もはやSFの設定集を読んでいると言われた方が信じられる。

手持ちの光学兵器だなんて私は一体どこに飛んでしまったの。

オーバーテクノロジーにも程がある。

一応新しい武器も使い方はわかったため、手元に装備した盾の裏に時間を繋ぎ、今までお世話になってきた兵器と加えて新たに使えるような武器を収納する。

ちなみに光学兵器は魔女に通用するかわからないので、そのままにしておいた。

いったいどうなってるのかしら？

手持ちが充実したにもかかわらず、拭い去れない嫌な予感を感じながら私は武器庫を去った。

5◇描画者 恐山茜（おそれやま あかね）（前書き）

どうしてこうなった（＾ω＾）
どうしてこうなった（＾ω＾）

5◇描画者 恐山茜（おそれやま あかね）

私は逃避する。



私の趣味は何かと問われれば、絵を描くこととしぶしぶ答えるだろう。

暇さえあればそれだけをしているし、時折読書や勉強、お情け程度の運動としてジョギングなどもするが趣味かと問われれば何か違う。たまに趣味は恋愛と答えるやつもいるが、そこまで本気の恋をしたこともない。

今までいた彼氏も告白されたから付き合っただけで本気になれなかった。

そんな気持ちで付き合っていたから長続きたことはない。

結局、それは恋以外にも言えることで全てのことだ。

絵だって上手いわけでも才能があるわけでもない。

コンクールに出したことはないし、そもそも美術部に入っているわけでもない。

かと言って、漫画を書いているのかとかイラストを投稿してるのかと言われてもそんな絵でもない。

私はただ単に林檎や時計、どこにでも有り触れたもので写實的に油絵を書いてるだけだ。

オリジナリティなんてない。
いつも代わり映えのしないただ現実目にあるものを描いただけ。

私は一人暮らしで小さなアパートに住んでいるから、私の部屋はいつも油の臭いがする。部屋中どこもかもが私の作品で埋まっている。ソファの上も玄関の靴箱の上もお風呂の脱衣所までそうだ。無事なのは精々風呂場とコンロの上くらいだろう。

これだけ書いていながら何も進展がない。

別に上手くなりたいわけではないから、私としては構わないつもりだが、自分の部屋を見渡し自分の書いてきたものを見つめると少し虚しさを感じる。

何の感情も込められずに描かれた作品達はまるで私を表しているかのようで。

ただ独りの時間を埋めるように描かれたそれらは、結局生から逃避しているだけの時間だった。



言い遅れたが、私は一度死んでいる。

全く別の名前で別の私で別の趣味があった。

最後はそんなプロフィールに関係なくトラックに跳ねられてスプラッタだ。

全く、世の中は世知がらいものだ。

あの頃はもう少し生と向き合っていた気がするが、死んで振り切れ

るものでもあったのだろうか？
死んでみたら、あまり優しくない神様と出会い、変なチート？みたいなものを貰い、ここに至るというわけだ。

この世界の名を魔法少女まどか☆マギカというらしいが、魔法少女で。対象年齢幾つの世界だ。おい、まどか。魔法少女って歳でもないのにいつの間にか曝されてるぜ、と現在隣でニコヤカに歩く彼女に心中でほくそ笑む。

これから先のことは全て知っているが、R-15のグロ展開だ。対象年齢は意外と高かった。

最近の魔法少女も本当侮れないものね。

知っている以上、幼い頃からの親友としてはできる限りは守ろうと思う。

さやかもあんな悲劇にはさせない。最後までさやかは円環の理に導かれっぱなしだったから、上条くんとかくっつけてやりたい……とは思うけど、仁美はそんなに悪くないし、むしろ堂々としてたし、かっこよかった。

だから、恋に関してはさやかを応援出来ないけど、せめて魔法少女にはさせたくない。

あんな結末を知っていながら彼女を魔法少女になんてさせるものか。

そういえば、同じくさやかの幼なじみとして転生した子守鶴さんは少し話をして同盟を結んである。

彼女もさやかを魔法少女にするのは反対らしく、私が同盟を持ち掛けたら積極的にOKしてくれた。

ただ、「あたしのさやかに色目を使わないでよ？ね？ね？変なことしたらやるよ？」と何をやるのかわからない、否、わかりたくないが、そんなことを色のない目と異様な雰囲気で言われた時は少し後悔した。

咄嗟に「私はまどか狙いです！」と言ってしまったが、「なら、よし！」と可愛い笑顔で返された。これで正解だったらしいが、……まどか、ごめん……。……。



いよいよ、原作が始まった。

暁美ほむらが転校してきたのだ。

腰まで伸びた黒いロングの髪と鋭い目付きは生で見ると少し怖い。私の席のそばを通る時、ジロリと睨みつけられてつい萎縮してしまったが、やはり私は彼女にとってイレギュラーなのだろうか？

原作の通り、まどかに頼み保健室まで案内？してもらっていた時の名場面も生で見た。

『この先何が起ころうとも「自分を変えよう」だなんて決しているとは思っては駄目』

か…………。

ほむらを知っているからわかる。

この言葉に籠められた深すぎる思い。

どんな気持ちでこの言葉を言ったのだろうか？

いや、

今の私からすれば、何故ここまで出来るのだろうか？という疑問の方が大きいかな。

大切なものを全て失って、自分のいた時間を全て捨てて彼女はまどかのために何故ここまで出来るのだろうか？

いずれ魔女になるか、魔女に喰われるかで長くない命と知りながら。

私はまだ魔法少女になっていない。

一度、鷗さんと一緒に魔女と戦いに行ったことがある。

チートの使い勝手を試すために、来たる原作に向けて軽い気持ちで向かったのだ。

チートがてんで通用しなかった。
驚いた。

チートがチートじゃなかった。

幸い私のチートは防御と回復重視だったのと、『境界を操る程度の能力』を持っていた鷗さんで何とか逃亡できたが、そのあとは追われていないか怖くて眠れない夜が数日続いた。

鷗さんとこれからのことを相談すると、鷗さんはすぐに魔法少女になることを決めていた。

魔法少女になれば魔女ともワルプルギスの夜ともまともに戦えるだろう、という結論に達したからだ。

それでも、私は、まだそこまで出来なかった。

確かにまどかもさやかも大切な親友だけど、そこまで本気になる必要があるだろうか？

私は怖い……。

あんな怪物と向き合うことなんて出来ない……。

鷗さんは笑って「無理する必要はないよ。さやかとついでにまどかも他の連中もあたしが守るさ」と言ってくれたけど、

私には鷗さんが何故そこまで本気なのか、わからなかった。

ほむらも同じだ。

何故二人ともそこまで本気になれるの？



習い事の予定で忙しい仁美と別れて、まどかとさやかと三人で下校する。

「ねえ、まどか。茜。CD買っている？」

「うん。いつものだね」

「彼のお見舞いかい？相変わらず熱いねえ」

「ちよっ。違うよっ！そんなんじゃないよ！」

「あははっ。さやかちゃん、顔赤ーい」

なんて軽いやり取りを交わしたのだが、

これは……原作フラグッ……！！

「ごめん。ちょっと電話していい？」

「うん？どうしたの茜ちゃん？何か用事？」

「ありゃ。ごめんねー付き合わせちゃって。用事あった？」

「ううん。気にしないで。大した用事じゃないから」

なんてやり取りをして、鶴さんに電話をかける。

「もしもし？鶴さんですか？茜です」

「おやおや、茜ちゃん。どうしたのかな？もしかしてさやかと一緒にズルいねえ。あたしの今生の最大の後悔はさやかと同じ年に生まれなかったことだからねえ。茜ちゃんが妬ましくて妬ましくて堪らないよ。いつそ皮を剥ぎ取って茜ちゃんに成り済ましてやろうか」

「すみません。間違えました」

電話を切る。

寸分置かず着信。

「ごめんよ。茜ちゃん。あたしの内なるリピドーが漏れ出ちゃっただけだから気にしないでおくれ」

……もうヤダこの人。

「……で、用件なのですが、キュウベえフラグです。今◆◆◆屋の中にあるCDショップに向かっています」

「ああ、いつものね。なるほど。あそこかあ。確かに今、あるフロアが改装中だったよ。了解した。キュウベえはぶつ殺しとくから、まどちゃんもさやかも近づけさせないでよ？」

「わかりました。暁美ほむらや他の連中もいるかもしれませんが。気をつけてください」

「ふふふっ。あたしのリピドーが火を吹くぜッ！！！！バーバーニイ
ー！ーングッツッ！！！！」

電話を切る。

両手で頭を抱えながら、激しく後悔……あれは本当に大丈夫なのだろうか……？

余程顔色が悪かったのか、まどかとさやかが色々気を遣ってくれた。

CDショップに到着して、さやかが目的のタイトルを探している間、私とまどかは試聴コーナーで最近の新作を聞いていた。

鶯さんは仕留めきれただろうか？

ブルルッ

スカートのポケットで携帯のバイブ！着信！鶯さんだ！

「もしもしっ！」

「ごめんっ！逃がした！まどかを行かせないでっ！」

急いでまどかの方を見ると、ちょうどヘッドフォンを外して顔はあらぬ方を向いている！

さやかには動きはない！まどかの変化にまだ気づいていない！さやかにはキュウベエの声は聞こえていない！ならば、まどかだけを止めればいい！

まどかがヘッドフォンを元の場所に置いてどこかへ向かおうとしたその瞬間、

「まあどかあ！」

「きゃいっ！」

私は後ろからまどかに抱き着き、まどかの胸を揉みしだいたっ！まどかが嬌声をあげるっ！

私は更に上から下になぶるようにまどかの胸を揉む！ぬっ！これは！

私は気づいた。

これは見た目とは違う！
中身が入ってる！
プリンだと？

「ひいやっ！あ…あか…ねちゃんっ！」

「おんやおやあ、まどかあ。また胸大きくなったあ？」

まだまだ！

お前にはいやらしい声を出してもらって、怪しい声のことを忘れてもらわないとイケないのだから！

耳たぶを甘く噛む

まどかの体は電撃が走ったかのように硬直する。

私は両手を微細に動かし、まどかの胸の感触を手全体で確かめていく。硬直する体とは裏腹にここだけ包み込むように柔らかい。

低反発クッションよりも私の手に合わせて形を変えるまどかの成長の印。

前よりも全然気持ちの良い感触。

「あか…ねッ、ちゃ…ん、ッ、イ…や」

「おいおい、成長期ってことですかあ？こりゃ、BからCにもうなってるんじゃない？」

うーん。

制服が邪魔だなあ。

制服の下から手を通して、直接揉もうかな。

スルリと制服の下に手を伸ばし、まどかの神秘を追求する。

いつかお風呂の時に「大人のおっぱいを目指そうね」だなんて言ってお互いの胸を揉み合っていたあの頃が懐かしい。

まな板だったあの頃とそう変わらないだろうと思っていたさっきまでの自分が恥ずかしいくらいだ。

ああ、すごい。

制服に纏われて外見ではわからないけれど、まどかにはいつの間にか男にとって金銀財宝よりも価値のあるワンピースが宿っていたのだ。そうか、まどかがラフテルなのだ!!

これに包まれて眠れる男は幸せだろう。

今の私でさえこんなに幸せなのだから。

「あ……あん。茜……ちゃん……、もっとお………」

「昔はペタンコだったのになあ! いつの間にか女になってたってわけ……っていったっ!」

本来の目的を忘れ、まどかの成長具合を確かめっていると、後ろから叩かれた。割と強め。

「茜! あんたここだと思ってるのよッ!」

顔を赤くしたさやかだった。

周りのお客さんから視線が私たちに向かって集中している。

「あつ。やべっ」

「やべっ、じゃないよ！何やってるんだ！あんたはっ！」

「つい」

「何がついよっ！」

「グスッ、グスッ」

まどかは泣き始めている。

ああ、理由があるとは言えまどかを泣かせてしまうなんて。謝って済む問題じゃないと思うけど、とりあえず謝らないと

「ごめんね。まどか、ついまどか見てたら興奮しちゃって」

「茜って変態だったんだね」

うるさいよ。さやか。

とは言いつつも、我ながら最低な理由である。もう少しまともな理由は思いつかなかったのか。

ぐずりながらまどかは口を開いた。

「……………あ、あ、」

「あ？」

「あ？」

思わず復唱する私とさやか。

「茜ちゃんのバカーーーーーッ!!!!」

「へブシッ!!」

「あ、茜ッ!? あ、ちょっと!! まどかッ!?」

まどかが私の顔に華麗な右ストレートを放って、泣きながら店から出ていった。

今のパンチ…回転してた。スクリューだったよ……
世界狙えるよ……まどか……。

「ちよっ……茜ーーーーッ!!」

こうして私はまどかとさやかのキュウベえフラグを回避させる代償に多くのモノを失ったのだった……。

5◇描画者 恐山茜（おそれやま あかね）（後書き）

ごめん。

やっぱりさ、男にはさ、やらなくてはいけないことがあると思うんだ。

ほら、まどかってさ、やっぱり、あれじゃん？
可愛いじゃん？

だからさ、揉ませなきゃって思ったんだよ。

ごめんな。

深夜のテンションで、ムラムラしてたからさ、つい、ついやっちゃったんだよ。

ホントは茜たんの話はこれで終わりにする予定だったんだけどさ、茜たんに俺のリピドーが憑依しちゃって
書くのが楽しすぎちゃって、

実は一番の本筋書けなかったんだよね。

こんな予定じゃなかったんだ。

ほら、最初茜たんシリアスだっただろ？

でも、CDショップ辺りからシリアルに変化してたじゃん？

もうこの頃から、茜たんにリピドーが注入されてた。

多分鶴さんのせいも一部ある。

ただ、まどかがイケないんだ。

可愛過ぎるからイケないんだ。

俺に、ああ、揉みたいって思わせるから悪いんだ。

そうだ。

『僕は悪くない』

6◇道化者 子守鶴（ねかみ つぐみ）

『ちよっ…………茜————ッ!!』

電話の向こうからさやかの声が聞こえて通話は終わった。
何をしたんだよ茜ちゃん…………。

まどかちゃんの嬌声がここまで聞こえてきたよ…………。

「電話は終わったかしら」

少しドスの聞いた声が、あたしに掛けられる。

暁美ほむらちゃんだ…………。

タイミング悪いっす。茜ちゃん。

まどかちゃんの嬌声がほむらちゃんにも聞こえちゃってましたよ…
…。

ほむらちゃんの殺気がビンビンくるっす。

キュウベえに向けてたんじゃないすかその殺気。

「まどかに何をしたの？」

いつもの端正な顔が般若にしか見えません。
助けて。さやか。お姉さん、チビリそうよ。」「早く答えて」

「はい。すみません。答えます。だから、こっちに向けたその銃を下ろしてくださいよ」

思わず両手をあげてフリーズしてしまう。
私の右胸に飾られた魔法少女の魂である橙色のソウルジェムが割られたら私は死んでしまうよ。
ほむらちゃんはいつの間にか手に持っていた黒い銃を下ろす。
ザ・ワールドをしたんですね。わかります。

「で？」

「え、えーっと。ここにちょっとした使い魔の気配がしたんで、ここに来てた避難するようあたしの友達に少し注意を促したのでございますよ。お、おほほ」

ヤバイ。動揺しまくりんぐ。
ほむらちゃんは何かジト目でこっち見てる。
これ絶対怪しんでるよ!？
茜ちゃん。お前のせいや! 帰ったら、ハラパンな？

くそお。キュウベえもどこに行きやがった？

逃げたのかこのやろー！
すると、後ろから

「なら、どうして私の親友を襲ったのか答えてもらえるかしら？」

げえ！？

この声はまさか！？

恐る恐る後ろを向くと

バマミちゃんが居た。

「キュウベえが怪我をしていたから話を聞いたら、あなた達がやったって言うじゃない！」

「まったく、どうして襲われたのか、訳がわからないよ」

その豊満な胸に埋まるようにキュウベえが抱えられており、にこやかにこちらを見ている。

幸せそうで何よりですね！？キュウベえさん！？

「……………それもそうね。何故使い魔を追ってきたはずのあなたがキュウベえに攻撃したの？」

「ギクッ」

追撃を仕掛けて来るほむらちゃんに固まるあたし。前門のほむらちゃん、後門のマミちゃん。

どうする！？どうする！？あたし！？

出て来て！ライフカード！

あたしのターン、ドロー！マジックカード発動！

『はぐらかす』

「キュウベえが使い魔に見えちゃって、テヘペロ」

「……………あながち、間違っていないわね」

「有り得ないでしょう！？あなたもキュウベえと契約したんでしょう？」

くっ。ほむらちゃんは大丈夫そうだったけど、流石にマミちゃんはダメか！

「なら、ついカツとなって！」

「それは使い魔にぶつけなさいよ！」

「高く売れるかなと思って！」

「売る気だったの！？？」

「耳毛の長さにイライラしちゃって！」

「…………そろそろ、いい加減にしてくれないかしら？」

「私の中のリピドーがバーニ……」

「ティロ」

「すみませんでした！！！」

土下座である。

生きのこるためには必要な土下座である。

困った時の土下座である。

マミちゃんは溜息をつきながら、具現化した大砲みたいな大きさのマスケツト銃を消す。

「いい加減に教えてくれないかしら」そうは言われても正直には答えられないよ。

『転生者』だと言っても、頭が可笑しいとしか思われないからね。だから、話せることなんてあんまりないよ。

「マミちゃん」

「ちゃ、ちゃん付け…？ま、まあ、いつか。で、ようやく話してくれる気になったの？」

「その歳で必殺技ってどうかと思…」

「ティロ・ファイナール」

「わなガペッ」

あと、必殺技はツツコミに使うものじゃないと思うですよ。

6◇道化者 子守鶴（ねかみ つぐみ）（後書き）

漫画版QB

ほむほむ銃はグロック17。理由は見た目が黒くて一目で銃とわかるような感じだったから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0944ba/>

短編(四)まどか☆マギカ二次転生小説導入

2012年1月7日03時50分発行